

唯物史観とチュチェ史観

井上 周八

はじめに

第一節 唯物史観の前提としての唯物弁証法

第二節 唯物史観

第三節 チュチェ史観の前提としての「人間中心の唯物論と弁証法」

第四節 チュチェ史観

はじめに

チュチェ哲学は、こんにち世界の各地で研究普及されつつある。毎年世界の各地でチュチェ思想国際討論会が開催されており、昨年2月にはデンマークのコペンハーゲンで開かれ、ロシアからも11名の代表団が参加した。今年は2月2日から5日にかけてモスクワで開かれ、エドモン・ジューブチュチェ思想国際研究所副理事長（パリ第5総合大学教授）、ホセ・フランシスコ・アギラル・ブルガレーリ副理事長（コスタリカ組織人民勢力党書記長、ラテンアメリカ・チュチェ思想研究所所長）、A・G・ポルシュネフ総長を団長とするロシア国立アカデミー代表団、共産党連盟—ソ連共産党評議会のオレグ・シェニン議長、世界での人間問題研究学者連盟のA・M・コワリョフ委員長（教授）を団長とするモスクワ国立総合大学代表団をはじめとする世界各地の代表団と代表が出席した。

また、朝鮮労働党代表団（団長黄長燁書記）、「韓民族民主戦線」代表の李相哲宣伝局長、在日本朝鮮茶会科学者協会会長の玄源錫朝鮮大学副学長を団長とする在日本朝鮮社会科学者代表団が参加した。

開幕に続き、シェニン議長、関寛治氏（チュチェ思想国際研究所理事、東京大学名誉教授、立命館大学教授）とアルバ・チャベス理事（エクアドル国立グアヤキル総合大学学部長）、パリ南部総合大学のピエール・バツテ名誉教授が祝賀演説を行ない、わたしもチュチェ思想国際研究所の理事長として「自主、平和、友好は人類共同の理念」という基調報告を行った。

わたしはこの報告のなかで次のように述べた。

「今日、世界にはさまざまな思想潮流が氾濫しており、混迷した状況にある。これは人類が思想の発展にしかるべき力をいれなかったため、思想が社会発展の現実的要求から立ち遅れていることにも原因があるが、特権階級が自らの特権を正当化し、進歩的な思想を弾圧して反動

的な思想を目的意識的に助長したところに、より重要な原因があると言える。

思想の解放を社会的解放に優先させなければならないということは普遍的な真理である。

人びとを非人間的で反社会主義的なさまざまな反動的思想の束縛から解放し、かれらが自主的な思想を身につけるようにしなくては、政治的経済的特権から解放する問題を解決することができない。

民族的範囲でも、世界的範囲でも、人間がその運命を立派に切り招いていくためには、その活動において主体を作ることが何よりも重要であり、主体をつくるうえでは思想における主体性からまず確立しなければならない。

それゆえ、今日、チュチェ思想の研究普及活動を力強く展開して、世界の人びとの意識をチュチェ思想化することは新しい世界をつくるための活動において第一義的な課題となるであろう。

.....

チュチェ思想の研究・普及活動を着実に行って、全世界を自主化するための思想的基礎がしっかりと築かれれば、自主、平和、友好の理念はりっぱに実現されるであろうし、全世界の人民が一つの主体をなし、人類の永久の発展をなし遂げようとするわれわれの理念は必ず実現されるであろう。」

チュチェ思想は、マルクス・レーニン主義と対比して考察することによって、その理解を深めることができる。マルクス主義の重要な柱は唯物史観である。

この小論文は、マルクス主義の唯物史観とチュチェ思想（主体思想）にもとづく歴史観の根本的相異について明確に解明することを目的としている。まず唯物史観の前提としての唯物弁証法の考察から始めよう。

第一節 唯物史観の前提としての唯物弁証法

マルクス主義の唯物史観（史的唯物論）は、弁証法的唯物論を社会・歴史の発展法則の解明に適用し、社会発展の法則を観念的ではなく自然史的過程として解明した歴史観である。

エンゲルスは『反デューリング論』（1878年）のための準備的労作のなかで「これまでの唯物論は、自然における思考と存在との関係については、いづらか理解していたけれども、歴史におけるそれを理解することができず、思考がそのときどきの歴史的な物質的諸条件に依存することを、洞察することができなかった」と述べている。

唯物史観は階級斗争理論と結びつけられた唯物弁証法的な歴史観であり、一切の観念論的歴史観を否定するものである。

唯物史観と階級斗争の理論が弁証法を媒介としてはじめて成立したことをエンゲルスは『空想から科学への社会主義の発展』（1883年）の第一版の序文で、「唯物史観と、それをプロレタリアートとブルジョアジーとの現代の階級斗争へ特別に適用することは、弁証法を媒介として

はじめて可能であった」と述べ、「科学的社会主義はじつに、本質的に、古典哲学が意識された弁証法の伝統をいきいきとたもってきたドイツでこそ完成することができたのである」と述べている。

「弁証法」(ディアレクティーク)という言葉は、「形而上学」(メタフィジック)という言葉と同様に、古代ギリシャ哲学から生まれた。ソクラテスの「問答法」(ディアレクティケー)という言葉が、「弁証法」を意味する「ディアレクティーク」という現代語の語源であることはよく知られている。

弁証法はドイツの古典哲学の最後の哲学者ヘーゲルによって、観念論的にはあったが理論化された。

エンゲルスは、「われわれドイツの社会主義者は、たんに、サン・シモン、フーリエ、オーエンの後継者であるばかりでなく、また、カント、フィヒテ、およびヘーゲルの後継者であることを誇りとしている」と述べている。

マルクス主義の哲学は唯物論と弁証法(弁証法的唯物論、唯物弁証法)である。

マルクス主義の唯物弁証法は、ドイツの古典哲学の総括者であるヘーゲル(1770~1831年)の弁証法からその合理的な核心を唯物論的に継承して、弁証法の三大法則として明らかにされたものである。

エンゲルスは『反デューリング論』の第二版(1885年)の序文で、「マルクスと私は、おそらく、意識的な弁証法をドイツの観念論哲学から救い出して、唯物論的な自然観と歴史観とのなかに取り入れた、ほとんど唯一の人間であった」と述べている。

エンゲルスはまた『空想から科学への社会主義の発展』で次のように述べている。

「近代のドイツ哲学の最大の功績は、思考の最高形式としての弁証法をふたたび取りあげたことごとであった。……この近代のドイツの哲学は、ヘーゲルの体系によってその完結に到達した。この体系のなかではじめて——そしてこのことがこの体系の大きな功績なのであるが——自然的・歴史的・精神世界の全体が一つの過程として、すなわち、不断に運動し、変化し、改造され、発展するものとして把握され、叙述されたのであり、またこの運動や発展のうちにある内的連関を指示する試みがなされたのである。」そしてこのことによって「世界はできあがった諸事物のある複合体としてではなしに諸過程のある複合体として把握されるべきであるという偉大な根本思想」(『フォイエルバッハ論』)が確立されたのである、と賞賛した。

ヘーゲルは観念論者としてではあるが弁証法を解明している。

ヘーゲルほど哲学史上で広範かつ徹底的に、歴史のなかに内的な関連と必然的な発展を証明しようと試みた者はいないといわれている。

ヘーゲルは観念論者として「絶対精神(理念)」の発展のなかにすべての事象の基礎をみた。この「絶対精神」とはすなわち「神」であると、ヘーゲルは述べている。そして物質的世界はこの「絶対精神」の一種の反射にすぎないと考えた。彼は、世界における究極の存在者は「絶

対精神」すなわち「神」であると説いた。

彼は、世界はこの「絶対精神」の自己展開の産物であるとして、この自己展開の過程を弁証法的過程として説明した。

ヘーゲルは個々の人間の精神に対する自然の先行を認めたが、しかし、その自然の背后に、さらにそれを生み出すものとしての「絶対精神」の存在を主張した。彼は「絶対精神」は永遠の昔から存在しており、この「絶対精神」が自然となり、自然のなかから人間が生まれ、この人間の精神としてふたたび精神的なものとなり、この人間精神の発展のなかで最後にまた「絶対精神」に回帰すると主張した。

この「絶対精神」→自然→人間→精神→「絶対精神」という絶対精神の自己展開をヘーゲルは、その学問体系のなかで弁証法的に叙述したのである。

ヘーゲルは、当時のあらゆる実証的な諸科学に広く通じており、それを普遍化して、観念論的に自己の哲学と調和させようと試みた。

論理学、自然哲学、精神哲学からなるヘーゲルの巨大な学問体系は、哲学史上もっとも包括的な、統一的な世界観樹立の試みの一つであったが、彼の弁証法は、多くの思弁的、観念的要素におかされておられ、人びとを混乱におとしいれてきた。

マルクス主義の唯物弁証法は、ヘーゲルの弁証法のなかから、その神秘的な、観念的な側面をすてさり、物質世界の一般的特徴を明らかにし、神秘主義と宿命論に帰着する観念論と形而上学を否定した。

マルクス主義の唯物論と弁証法は「自然の唯物論」であり、「自然の弁証法」である。

エンゲルスは著書『自然の弁証法』（1873年から1883年にかけて執筆）のなかで、「弁証法、いわゆる客観的弁証法は、自然全体を支配するものであり、またいわゆる主観的弁証法、弁証法的な思考は、自然のいたるところでその真価を現わしているところの、もろもろの対立における運動の反映にすぎない」と述べている。

マルクスは、ヘーゲルの弁証法が神秘化されているが、しかし、ヘーゲルが弁証法の最初の包括的な叙述を与えた人であることを次のように述べている。

「弁証法がヘーゲルの手中で神秘化されているといっても、ヘーゲルが、弁証法の一般的な運動諸形態を包括的なまた意識的な仕方で叙述した最初の人であるという事実は、すこしもかわりない。弁証法は彼にあってはさかだちしている。神秘的な外被のうちの合理的な核心を見いだすためには、それをひっくり返さねばならない。」（『資本論』第一巻第二版への「あとがき」）

私の弁証法的方法は「ヘーゲルの弁証法と根本から異なるのみならず、その正反対である。……ヘーゲルにとっては、彼が理念の名の下に自立的主体となっている思惟過程が、現実的なものの造物主であり、現実的なものはこの思惟過程の外的な現象であるにすぎない。これに反して私にあっては、観念的なものは、物質的なものが人間の頭脳の中に移されて転倒されたものに

ほかならない。」(同上)

ヘーゲルの弁証法は、著書『大論理学』(1812~16年)や『小論理学』(1817年)などで論理学として、観念的な思考の法則として解明されている。

エンゲルスは『自然の弁証法』のなかで次のように述べている。

「……自然および人間社会の歴史からこそ、弁証法の諸法則は抽出される。これらの法則は、まさにこれら二つの局面での歴史的発展ならびに思考そのものの最も一般的な法則にほかならない。しかもそれらはだいたいにおいて三つの法則に帰着する。すなわち、

量から質への転化、またその逆の転化の法則

対立物の相互滲透の法則

否定の否定の法則

これら三法則はすべて、ヘーゲルによって彼の観念論的な流儀にしたがってたんなる思考法則として展開されている。すなわち第一の法則は『論理学』の第一部、存在論のなかにあり、第二の法則は彼の『論理学』のとりわけ最も重要な第二部、本質論の全体を占めており、最後に第三の法則は全体系の構築のための根本法則として役割を演じている。誤謬は、これらの法則が思考法則として自然と歴史とに天下り的に押しつけられていて、自然と歴史とからみちびきだされていないという点にある。そしてここからあの無理にこしらえあげられ、しばしば身の毛もよだつものとなっている構成の全体が生じてきている。すなわちそこでは、世界は、好むと否とにかかわらず、ある思想体系——に合致していなければならないのである。」

ヘーゲルは「量から質への転化、またその逆の転化の法則」について次のように説明している。

ヘーゲルによれば質とは「或るものを当のその或るものと規定させるところのもの」である。また量に関しては、それが無規定な、質を持たないことを意味するのではなく、差し当たって「規定性に無関係で有る」ところの等質性を前提にしている範疇である、としている。

そして、このような量的規定が潜在的に前提している質が変わらぬという論理的条件は現実においては至るところで一定の限度をもっている。この限度の存在を指摘するのが「量質転化の法則」(「限度から限度への法則」)であるとして、ヘーゲルは次のように述べている。

「われわれが対象の世界の考察に際して、量的規定を問題にしている場合、われわれが実際にその目標として念頭においているのは常に限度である。化学においても化合した諸物質の量を知るのは、そうした化合を制約している割合を、すなわち特定の質の根底に横たわっている量を認識するためである。統計においても、そこでわれわれが取り扱う数は、それが制約している質的効果のためにのみ興味があるのである。これに反して、以上述べたような指導的見地を欠いた単なる数字の確定は、正当にも理論的興味もなければ実践的興味もない空虚な好奇心と思われている。」(同上)

ヘーゲルは、第二の法則「対立物の相互滲透の法則」について「有」、「無」、「成」の論理と

して次のように述べている。

ヘーゲルによれば、すべての事物は生成変化、流動のうちにあるのであって、ただ「ある」と考えるのは一面的であり、ただ「ない」と考えるのも同じ一面的である。一口に言えばヘラクレイトスが言ったように「万物は流転する」のである。有、無、成の論理は、この流転の論理のもっとも抽象的な表現である。

ヘーゲルによれば「有」という概念はもっとも抽象的な、全く空虚な概念である。

「有、純粹有——なんらそれ以上の規定をもたないもの」と規定された「有」は「純粹な抽象であり、従って絶対的な否定である。そしてこれは同様に直接的にとらえれば無である」と解釈され、さらに「それ故に無は純粹有と同一の規定、否むしろ同一の没規定性であって、従って一般には純粹有と全く同一のものである」と確言される。

このようにヘーゲルは有と無が同一であることを証明したうえで「有および無の真理は両者の統一であり、この統一がすなわち成である」と言う。

このような考えはヘーゲルが頭のなかで思弁的に考えたことであるが、しかし、これを唯物論的にみるならば、すべての事物は、それ自身のなかに、自己否定する他者を持ち、この両者の矛盾によって、より高次の事物へと発展する、ということになる。

次にヘーゲルは「否定の否定の法則」も、概念の自己運動として解明した。すなわち、Aは自分のなかに非Aという自己否定をもつ。そこでこの非Aはさらに否定されてより高次の概念に移行する。この発展過程で、最初のAがテーゼ (These) 定立であり、これを否定するのがアンチテーゼ (Antithese) 反定立であり、両者の矛盾を克服した段階がジンテーゼ (Synthese) 合である。

ヘーゲルは、ほぼ以上のように、エンゲルスが『自然の弁証法』で要約した弁証法の三つの法則について明らかにしたのである。

マルクス主義の弁証法は、ヘーゲルの弁証法を「自然の弁証法」として解明している。

「自然の弁証法」は物質世界の一般的な変化発展の法則である。

エンゲルスは『反デューリング論』で、「自然は弁証法の証明である。だからわれわれは、近代的自然科学については、それはこの証明のためにきわめて豊富な、日々ふえてゆく材料を提供し、かくして自然における事物の経過は、つまるところ弁証法的であって形而上学的ではない、ということを証明したといわなければならない」と述べている。

以下、マルクス主義の弁証法が三つの法則をどのように解明したかを簡単にみよう。

(1) 量から質への転化、またその逆の転化の法則。

エンゲルスは『自然の弁証法』のなかで次のように述べている。

「この法則を、われわれは、われわれの目的のために、次のように表現することができる。すなわち、自然のなかでは、各個それぞれの場合に精密に確定している仕方で、質的变化が起こりうるのは、ただ物質または運動（いわゆるエネルギー）の量的な増減があるからである。

自然におけるすべての質的区別は、相異なる科学的組成に基づくか、運動の相異なる量ないし形態に基づくか、あるいは、ほとんどいつでもそうであるが、これら二つのことに共に基づくからである。それゆえ、物質あるいは運動のプラスないしマイナスなしには、つまりその当の物体の量的変化なしには、その物質の質を変えることは不可能である。」

エンゲルスは、その例として、水の温度の変化がある点に達すると突然に変化した状態を起す最もよく知られた例として、水の固体、液体、気体の三態への変化をあげている。

(2) 対立物の相互浸透の法則

対立物の相互浸透の法則とは、自然のあらゆる現象および変化発展の過程には、たがいに対立した、排除しあう側面があり、対立物のそれぞれの側面は、自己に対立する側面を自己の存在の前提としており、双方が一つの統一体のうちに共存しているばかりでなく、矛盾する双方が、一定の条件のもとで、その反対の側面へ浸透するという法則である。

対立物の斗争は、事物発展の原動力であり、この見地によってのみ物質の自己運動、古いものの消滅と新しいものの発生を把握することができる。

マルクス主義の弁証法は、条件的、相対的な同一性と、無条件的で絶対的な斗争性とが結合して、あらゆる事物の矛盾の運動がなされるとみている。

マルクス主義の弁証法を継承して、このことを特に強調したのはレーニンである。

レーニンは『弁証法の問題について』(1915年執筆)で、「統一的なものが二つに分裂すること、この統一的なものの矛盾した二つの部分を認識することは、弁証法の核心である。ヘーゲルもまさにこのように問題を提起している。……

対立物の同一(おそらく対立物の『統一』と言うほうが正しいのではないか?)とは、自然(精神も社会もふくめて)のすべての現象と過程のうちに、矛盾した、たがいに排除しあう、対立した傾向を承認すること(発見すること)である。世界のすべての過程を、その『自己運動』において、その自発的な発展において、その生き生きとした生命において認識するための条件は、それらを対立物の統一として認識することである。発展は対立物の『斗争』であると述べている。

このように、対立物の統一または同一とは、社会、精神を含めて、自然のあらゆる現象および過程のうちに矛盾した、たがいに排除しあう、対立した傾向が存在し、それらの対立する側面が、それぞれ、自己に対立する側面を自己の存在の前提としており、双方が一つの統一体のうちに共有するばかりでなく、矛盾する双方が一定の条件にしたがって、その反対の側面に転化することである。

マルクス・レーニン主義は、対立物の統一は条件的、一時的であるが、対立物の斗争は絶対的であるから、統一は一定段階で分裂し、事物は質的に変化する、とみている。

(3) 否定の否定の法則

ヘーゲルの概念的な弁証法は、既述のように三段階の進行形式(正→反→合)をとっていた。

これが否定の否定の法則である。

否定の否定の法則を論証するためエンゲルスは麦粒を例として『反デューリング論』で次のように述べている。

「大麦の一粒をとってみよう。何兆のこういった大麦の粒が引き砕かれ、煮られ、醸され、そして食べられる。しかし、もしこのような大麦の一粒が、それにとって正常な条件に出合っ
て好適な地面に落ちるとすれば、温度と湿気の影響をうけて、その一粒に固有の変化が起こっ
て、発芽する。麦粒そのものは消滅し否定されるが、それに代わって、その粒から発生した植
物があらわれる。つまり粒の否定が現われるのである。しかし、この植物の正常な生活過程と
は何であろうか。その植物は、生長し、花を開き、実を結び、そして最後にふたたび大麦の粒
を産出する。そして、この粒が熟するやいなや、茎は死滅し、こんどはこの茎が否定される。……

それでは、否定の否定とは何か。それは、自然、歴史、思考の極めて普遍的な、そしてその
ゆえにこそ極めて広く作用している重要な発展法則である。それは、われわれがみてきたよう
に、動物界、植物界、地質界、数学、歴史、哲学において効力をもっている法則である。」

マルクスの唯物史観は、以上でみた唯物弁証法の社会・歴史への適用である。

第二節 唯物史観

マルクスとエンゲルスは1840年代の中葉に、唯物史観と、プロレタリアートの歴史的使命に
ついの見解をつくりあげた。

1844年8月末、パリでマルクスとエンゲルスは会見し、革命的な理論活動と実践活動のあら
ゆる分野で二人は協力を開始した。

マルクスとエンゲルスは最初の共同労作『聖家族』（別名『批判的批判の批判。ブルーノ・
バウアーとその伴侶を駁す』）を1844年9月～46年2月の間に執筆した。聖家族とは青年ヘー
ゲル派のバウアー兄弟と彼らの信奉者たちにマルクスとエンゲルスが、からかってつけた名前
である。

『聖家族』で二人はヘーゲルの弁証法にふくまれている合理的な核心に正当な地位を与えな
がらも、彼の弁証法が、事物を神秘化している点に批判を加えた。

マルクスとエンゲルスは『聖家族』で、早くも階級としてのプロレタリアートの世界史的な
役割についての見解をほとんど確立していた。彼らは、プロレタリアートは、資本主義のもと
で彼らが占めている地位のために「自分自身を解放することができるし、また解放せざるをえ
ない」が、それと同時に「ブルジョア社会のいっさいの非人間的な生活条件を廃止することがで
き、また廃止せざるをえない階級であること」を明らかにした。彼らは『聖家族』で「歴史を
つくる」のは超自然的な力でもなければ、人間の常識でも「英雄」でもなく、勤労人民であり、
彼らとその労働と政治斗争をつうじて社会の発展を推進するのであると述べ、資本主義社会で

は、プロレタリアートはみずからを解放することによって、いっさいの非人間的な生活条件を揚棄する使命をもっていることを明らかにし、「問題はプロレタリアートがなんであるか、また彼の存在におうじて歴史的になにをするように余儀なくされているか、ということである。その目的と歴史的行動は、彼自身の生活状態のうちにも、また今日のブルジョア社会の全組織のうちにも、明白に、取り消しようのないように示されている」と述べていた。

マルクスが1840年代の中頃に観念論と訣別し唯物論者、共産主義者となったことは雑誌『独仏年誌』に発表した諸論文や当時の手紙によって知ることができるが、この『独仏年誌』の最初の一冊が合併号として1844年2月に出版され、そしてそこに、マルクスは『ユダヤ人問題によせて』と『ヘーゲル法哲学批判・序説』をのせたのであるが、この論文でマルクスは、ヘーゲル哲学のテーゼを近代ブルジョア＝資本主義社会の発生史と既存の状態にてらして再検討することによって彼のヘーゲル哲学批判を完了した。

マルクスとエンゲルスは、1845～6年に未発表の原稿『ドイツ・イデオロギー』を書いたが、そのなかで、フォイエルバッハや彼以前の唯物論者たちのように、唯物論的観察方法をたんに自然に適用するだけでなく、人間社会とその歴史にも適用しはじめ、人間はおよそ政治、科学、芸術、宗教にたずさわるまえに食べ、飲み、住み、着なければならぬこと、生活のために必要な物質的財貨の生産が、したがって国民のそれぞれの経済的発展段階が、その歴史的発展の基礎であり、出発点であるという結論に達していた。

唯物史観を定式化した文献として有名なのは『経済学批判』（1859年6月、第1冊出版）の「序説」である。マルクスはそのなかではじめて、彼の唯物史観の主要テーゼを集約的な、簡潔な、体系的な形で公表した。

そこでの彼の見解は次の如くである。

(1) 人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。

(2) これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。

(3) これが実在的土台であり、その上に一つの法律のおよび政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的意識形態が対応する。

(4) 物質的生活の生産様式が、社会のおよび精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。

(5) 社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎないものである所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。

(6) 経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激に

くつがえる。

(7) このような諸革命の考察にあたっては、経済的生産諸条件における物質的な、自然科学的に正確に確認できる変革と、それで人間がこの衝突を意識するようになり、これとたたかって決着をつけるところの法律的な、政治的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー諸形態とをつねに区別しなければならない。……このような変革の時期をその時期の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係の矛盾とのあいだに既存する衝突から説明しなくてはならない。

(8) 一つの社会構成は、それが生産諸力にとって十分の余地をもち、この生産諸力がすべて発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されてしまうまでは、けっして古いものにとって代わることはない。

(9) 大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されうる。

(10) ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的な生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがってこの社会構成でもって人間社会の前史は終る。

以上がマルクスの与えた唯物史観の要約である。

エンゲルスもこの要約にもとづき『反デューリング論』で、「生産力と生産様式との衝突は、人間の頭のなかで生まれた衝突ではなく、諸事実のなかに、客観的に、われわれのそとに、この衝突を引きおこす当の人々自身の意志や行動から独立に、存在しているのである。近代の社会主義は、この衝突の思想的反射、まず第一に、この衝突によって直接苦しめられている階級、すなわち労働者階級の頭のなかでの概念的反映にほかならない」と述べている。

レーニンはマルクス主義が、社会発展の法則を科学にまで高めたこと、初期の著作『「人民の友」とは何か、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか』（1894年）で次のように述べている。

「マルクスとエンゲルスが——形而上学的方法に対置して——弁証法的方式と名づけたものは、社会学における科学的方法にほかならないのであって、その方法とは、社会を、不断に発展する有機体として（なにか機械的に連結され、したがって、個々の社会的要素のあらゆる恣意的な組合せを容認するものとしてではなく）観察することであり、この生きた有機体を研究するには、当該の社会構成体を形成する生産関係を客観的に分析し、この社会構成体の機能と発展との諸法則を考究しなければならないのである。」

レーニンはまた、マルクスが『経済学批判』の「序言」で唯物史観を要約したことを、「人

間社会とその歴史とにおしおよぼされた唯物論の基本的諸命題の完全な定式を与えた」と述べ、その科学的意義を高く評価した。

唯物史観は、一切の観念史観を否定し、階級社会が発生して資本主義社会にいたるまでの人類の歴史を唯物弁証法的に考察し、人類の歴史は階級斗争の歴史であり、階級斗争が発生する根本原因は経済問題であり、生産力と生産関係の矛盾の激化にあるとみた。

エンゲルスは『反デューリング論』で次のように述べている。

「唯物史観は次の命題から出発する。すなわち、生産が、そして生産についてはその生産物の交換が、あらゆる社会制度の基礎であり、歴史上にあらわれるどの社会においても生産物の配分は、それとともにまた諸階級または諸身分への社会の区分は、なにを、どのようにして生産するか、そして生産されたものをどのようにして交換するかによってきまるという命題である。この見地からすれば、あらゆる社会的変化と政治的変革との究極の原因は、人間の頭のなかに、永遠の真理や正義についての人間の洞察がますます深まってゆくということに、求めるべきではなく、生産および交換の様式の変化に求めなければならない。それは、その時代の哲学にではなく、経済に求めなければならない。」

マルクス主義の唯物史観によれば、或る生産関係のもとで生産力が発展し、やがて生産力がその生産関係のもとではそれ以上発展できない限界に達すると、すなわち生産力と生産関係の矛盾が激化すると、この矛盾が階級斗争を惹起し、階級斗争によって解決され、新しい生産関係を生み出す。

ここで生産力というのは、生産における人と自然の関係をいみすねことばであり、生産関係とは生産における人と人との関係、階級社会にあっては階級と階級との関係を意味することばである。そして、この生産力と生産関係の統一物が生産様式（生産方式）、または社会の経済的構成である。

マルクス主義は、原始共同社会を除き、これまでの社会の発展は、階級斗争の歴史であるとみた。そして、この階級斗争を必然化する原因が、生産力と生産関係の矛盾であるとして、社会・歴史の発展を、生産力と生産関係の矛盾を原因として発展する自然史的過程とみる唯物史観を確立したのである。

エンゲルスは『空想から科学への社会主義の発展』の初版（1883年）で、「これまでのすべての歴史は、原始状態を別とすれば、階級斗争の歴史であった」と述べたのち、この対立し、斗争する階級は、「いつでも、その時代の生産および交易の関係、一言でいえば経済関係の産物であること、したがって、社会のそのときどきの経済構造が実在的な土台をなしており、それぞれの歴史的時期における法のおよび政治的諸制度、ならびに宗教的、哲学的その他の考え方からなる上部構造全体は、終局的にはこの土台によって説明すべきものだということ」（『反デューリング論』）が唯物論的な歴史観によって明らかにされたと述べ、「これまでのように人間の存在をその意識によって説明するのではなくて、人間の意識をその存在によって説明する

道が見い出されたのである」(同上)と述べている。

マルクス・レーニン主義は、プロレタリアート解放を実現するうえでの指導指針となって多大の貢献をなすとげ、唯物史観も一定の役割を果たした。

しかし、マルクス・レーニン主義と唯物史観は歴史的制約性をもつものであった。

金正日書記は次のように述べている。

「マルクス主義は労働者階級が歴史の舞台に登場して資本に反対する斗争を繰り広げていた時期に創始された革命学説として、搾取階級と搾取制度を精算し、人民大衆の階級的解放を実現するうえで不滅の貢献となりました。しかし、時代は変わり歴史は発展する以上、マルクス主義も歴史的な制約を免れません。

マルクス主義は、一言で言うならば、唯物史観にもとづいて労働者階級の階級的解放の条件を解明した学説であるといえます。

マルクス主義は社会発展の過程を自然史的過程と見なし、生産力の発展に伴って生産関係が進展し、生産関係の総体である経済制度が当該社会の土台をなし、その土台のうえに上部構造が確立されるとの理論をうち出しました。これにもとづきマルクス主義は物質的富の生産様式が社会の性格と社会発展の水準を規定する決定的な要因であり、社会の発展過程は、階級斗争を通じて生産力と生産関係の矛盾が解決され、旧い方式が新しい生産方式に交替する過程と見ました。マルクス主義はこうした原理から出発して、社会主義生産方式が確立されれば資本主義から社会主義へ移行する社会革命は終るものと決めており、共産主義の高い段階と低い段階の相違は、生産力の発展水準の差異に帰着するので社会主義制度が確立された後は、経済建設をして生産力を発展させさえすれば人類の理想社会である共産主義を実現できると見たのです。結局、マルクス主義は社会制度が樹立された後、革命を継続させて社会主義、共産主義社会をどのように建設すべきかという問題に対しては正しい解答を与えることができませんでした。歴史的に見る時、マルクス主義は社会主義偉業の先行段階の要求を反映した思想理論であって、社会主義、共産主義建設の具体的方途を明らかにすることを当面の課題として提起しなかったし、当時はまだそのようにしうる社会的条件も、実践的な経験もありませんでした。」(『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』1992年1月3日)

社会・歴史の発展を自然史的過程とみた唯物史観の歴史的制約性をとり除き、社会・歴史の主体を人民大衆であるとみたチュチェ史観は、朝鮮の金日成主席によって創始され、金正日書記によって発展させられた。以下、次節で、チュチェ史観の前提である「人間中心の唯物論と弁証法」について考察しよう。

第三節 チュチェ史観の前提としての「人間中心の唯物論と弁証法」

マルクス・レーニン主義の哲学である唯物論と弁証法は、「自然の唯物論」であり

「自然の弁証法」であった。

またマルクス・レーニン主義は、社会・歴史の発展も自然史的過程とみなし、生産力と生産関係の矛盾によって社会は発展する、とみた。

マルクス主義は、階級斗争を重視したが、階級斗争も結局、生産力と生産関係の矛盾によって発生する、とみた。

これにたいして、チュチュエ哲学は、マルクス・レーニン主義の哲学である「自然の唯物論」と「自然の弁証法」を継承し、これを前提としたうえで、物質世界の最高の存在である人間を中心に、唯物論と弁証法を深化発展、より完成させて包摂している。

いうまでもなく、自然は本源的な物質であり、自然は変化発展してきた。したがって「自然の唯物論」と「自然の弁証法」それ自体は否定できない。しかし、現実世界をただ自然としてみるのは、こんにちでは正しくない。唯物論を徹底させるには、物質の最高の発展としての人間を中心に据えねばならず、弁証法を徹底させるには、人間の運動法則を中心として弁証法を解明しなければならない。

自然的世界は、(1)無生命物質だけの世界から、(2)無生命物質と生命物質の存在する世界へと移行し、さらに(3)無生命物質と生命物質および社会的生命物質（人間）の存在する世界へと変化してきた。

自然的物質の変化発展の過程で、物質は単純な物質から次第に複雑な物質へと発展し、やがて無生命物質から生命物質が生まれ、ついに人類が発生したことは、周知の通りである。

人間は一切の生命物質のなかでもっとも発達した物質であり、自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在である。

チュチュエ哲学は、人間の存在するこの世界で、世界を支配する主人は誰であり、世界を改造する力はどこにあるのかという問題を提起し、これに新たな解答を与え、神中心の世界観にたいし、人間中心の世界観を確立した。

唯物論は、世界の万物はそれぞれ異なっているが、それらはすべて客観的に存在している物質であり、世界には物質でないどのような存在もあり得ないことを明らかにした。

また弁証法は、世界の万物が、固定不変なものではなく、それぞれの物質の属性にもとづいて変化発展していることを明らかにした。

唯物論と弁証法が勝利し、観念論と形而上学が否定されたことは、人類の思想史上における大きな前進であった。

なぜなら、もし観念論と形而上学が勝利しているならば、人間は神とか絶対精神とか、その他の何らかの非科学的な観念に支配され、人間以外の何ものかに、その運命を決定されてしまうからである。

観念論を否定し、唯物論が勝利したとき、そのときはじめて人間は、この物質世界の特出した存在である自己自身に依拠して、自己の運命の主人となり、この世界の主人として生き発展

することができるのである。

金正日書記は次のように述べている。

「人間も、自然の長い進化発展の過程で発生した、生命をもつ物質的存在であるという点では、他の生命物質と共通の基礎をもっていますが、その発展水準においては質的な差があります。したがって世界における人間の地位と役割も、他の物質的存在とは根本的に異なっています。

物質世界において主人の地位をしめるのは自然ではなく、人間です。物質世界において、人間は唯一の自主的な存在です。動物は自然の変化発展の法則によってその運命が決定される自然の一部ですが、人間は自然の変化発展の法則を科学的に認識し、それにもとづいて自然を自己の要求に即して改造し、それを自分に奉仕するようにしていく、世界の有力な主人です。人間は自然の変化発展の法則に服従して、自然と運命をともしる存在なのではなく、人間社会に固有の社会的運動法則にしたがい、自己の運命を自主的に、創造的に開拓していく社会的存在なのです。自然を改造する人間の創造的役割が大きくなるほど、世界の主人としての人間の地位はさらに高まり、人間の外にある物質世界はいっそう人間に奉仕する世界に変えられていくのです。

人間は世界を自己の要求に即して目的意識的に改造していく唯一の創造的存在であるため、世界において主人の地位を占めるばかりでなく、世界を改造し発展させるうえでも決定的な役割を果たします。

人間が世界において主人の地位をしめ、世界の発展において決定的役割を果たすというのは、人間が生きているこんにちの世界にたいする主体的な見解です。世界がどの程度に発展しており、今後どの方向にどう発展していくかということは、世界における人間の主人としての地位と、世界を改造する人間の創造的役割をぬきにしては理解できません。」（『チュチェ思想教育における若干の問題について』1986年7月15日）

以上の書記のことは、別言すれば、唯物論は人間中心の唯物論でなければならず、弁証法も人間中心の弁証法でなければならないということを教えているのである。

金正日書記が述べているように、物質世界で主人の地位を占めるのは、自然ではなく人間である。なぜなら、人間は物質世界で最高の発達をとげた自主性、創造性、意識性をもつ唯一の社会的存在だからである。

書記は次のように述べている。

「人間は自主性をもつ存在、自主的な社会的存在であります。

自主性は世界と自己の運命の主人として自主的に生き発展しようとする社会的人間の属性であります。自主性ゆえに、人間は自然の束縛をふり払い、社会のすべての従属に反対し、すべてを自己に奉仕するよう変えていきます。」（『チュチェ思想について』1982年3月31日）

人間は、あらゆる従属と抱束に反対して生きるために、世界のあらゆるものを人間のために

改造変革する。

人間から自主性を取り去ってしまうなら、それはもはや人間ということとはできない。自主性のない生き方は、ただ自然に順応して生きる生き方であり、動物と異なるところのない生き方である。

人間は自主性と同時に創造性をもつ社会的存在である。

創造性は、自主性を実現するために、世界を改造し、自己の運命を切り拓いていく人間の属性である。

人間は創造性をもっているので、古いものを変革し、新しいものを創造し、自然と社会を人間にとって有益なものに改造し、さらに世界の改造者である人間自身を改造する。

自主性が世界における人間の地位を表現しているのに対し、創造性は世界の改造者としての人間の役割を表現している。

人間はまた、意識性をもつ社会的存在である。

金正日書記は次のように述べている。

「人間は意識性をもつ存在、意識的な社会的存在であります。意識性は世界と自分自身を把握し改造するすべての活動を規制する社会的人間の属性であります。意識性ゆえに、人間は世界とその運動、発展の合法則性を把握し、自然と社会を自己の要求に即して改造し発展させていきます。意識性によって社会的存在である人間の自主性、創造性が裏打ちされ、その合目的な認識活動と実践活動が保障されます。」(同上)

ここで指摘されているように、意識性は世界と自分自身を把握し改造する人間のすべての活動を規制している人間の属性である。

意識性があるので人間は世界を認識し、世界と自己の要求にあわせて改造することができるのである。

自主性は意識的に提起される自主的要求であり、創造性は意識的に作用する創造的能力である。意識性を離れて自主性、創造性はありません、自主的、創造的活動はありません。

意識性は、すべての認識活動と実践活動を規制する。

人間は、自主性、創造性、意識性をもっている物質世界における唯一の存在であるため、あらゆるものの主人であり、すべてを決定するのであり、また自己の運命の主人でもある。

マルクス・レーニン主義の唯物論と弁証法は観念論と形而上学を克服したのであるが、しかし、その歴史的制約性によって、人間の特出した地位と役割を明確にすることはできなかった。

金正日書記は、世界における人間の地位と役割を明らかにしたチュチェ哲学が、それまでの世界観の一面性を克服した哲学であることを次のように述べている。

「世界における人間の地位と役割は、物質世界の一般的特徴と人間の本質的特性にたいする哲学的解明にもとづいてのみ明らかにすることができるのであるから、人間中心の哲学的世界観は、物質世界の一般的特徴を解明する原理と、人間の本質的特性を解明する原理、さらにま

た世界における人間の地位と役割を解明する原理のいずれをも包括していることになります。こういう点で、チュチュの世界観は従来の哲学的世界観にあった一面性を克服し、世界の本質と人間の運命の問題にもっとも深奥かつ包括的な解明を与えた哲学的世界観であるといえます。」(『チュチュ思想教育における若干の問題について』)

このようにチュチュ哲学は、〔1〕物質世界の一般的特徴を解明する原理(マルクス・レーニン主義の唯物論と弁証法がこれである)、〔2〕人間の本質的特性を解明する原理、〔3〕世界における人間の地位と役割を解明する原理、という三つの原理を包括している人間中心の哲学的世界観である。

三つの原理を包摂しているチュチュ哲学は、唯物論と弁証法を深化発展させ、こんにちの現実世界の真の姿を解明している。

金正日書記は次のように述べている。

「チュチュ哲学は唯物論と弁証法の原理をすてたのではなく、それを前提にして物質世界における人間の特出した地位と役割を科学的に解明することにより、唯物弁証法をさらに完成させたといえます。」(『チュチュ思想教育における若干の問題について』)

今日の物質世界は、単なる自然的存在としての世界ではなく、世界の主人である人間が決定的役割を果たしている世界である。したがって世界の根源を物質とみる唯物論は、世界の主人である人間を中心とする唯物論となつてのみ、真の唯物論となることができるのであり、弁証法も人間中心の弁証法となつてのみ真の弁証法となることができるのである。

金正日書記は次のように述べている。

「歴史の発展にともない世界の主人としての人間の地位と役割は強まり、その自主的、創造的、意識的な斗争によって人間の意思に支配される世界の領域は日増しに拡大されています。

現時代に至って人民大衆は世界の真の主人として登場し、その斗争によって世界はますます人民大衆に奉仕する世界に変わりつつあります。」(『チュチュ思想について』)

チュチュ哲学は、世界の一般的特徴を解明した唯物論と弁証法を前提にして、人間の本質的属性と世界における人間の地位と役割を思想史上はじめて解明し、このことによって唯物論と弁証法を人間を中心として深化発展より完成させ、人間の尊厳と価値を限りなく高めたのである。

「人間中心の弁証法」は「量・質の法則」を深化発展させた。量と質の相互関係に関する最も普遍的な真理は、物質の構成要素と結合構造によって物質の性質が変わり、物質の性質が変われば物質の運動も変わるという真理である。人間はこの真理を発見したことにより、世界を科学的に認識し、物質の構造と質と運動を自己の要求に即して改造しうる無限の可能性をもつにいたった。これは、人間が世界の主人、自己の運命の主人になりうるという人間中心の世界観を確立するうえで根本的な意義をもつものである。

また「対立物の斗争と統一の法則」についても新たな内容を提示した。かつて、この法則を

説明するうえでも、発展の原因と原動力を正しく取り扱っていなかったばかりでなく、発展が斗争を通して成しとげられるということを強調するのに重点を置いた。これは、この法則を歴史の発展は階級斗争によるという主張の正当性に利用しようとする階級的立場と関連していた。

対立物の統一とその変化発展に関する原理は、単に物質の運動とのみ関連するものではなく、物質の存在と運動変化・発展を全部包括している。言い換えれば、対立物の統一とその変化・発展に関する特徴をともに包括している。

すべての物質的存在は対立物の統一からなっている。物質の構成要素はそれぞれ異なる特性をもっているという点で、物質存在の対立の面を代表しており、物質の結合構造はさまざまな要素を共通性に基づいて一つに結合させている点で、物質存在の統一の面を代表している。対立物の統一は矛盾的で相対的なものであるので、それを維持するための運動なくしては維持されない。それはもっとも発達した対立物の統一である人間社会で明白に現われている。社会は各個人からなっているという点で多様な対立物からなっている。しかし、各個人は人間としての共通の属性をもっている。人間は個人としての自己の固有の属性と社会的人間の属性をともに実現することを要求する。それゆえ、社会は自然発生的に維持されず、もっぱら人間の目的意識的な相互作用、相互協力と協調を通じてのみ維持される。

物質の構成要素と結合構造は物質存在の量的規定性を代表し、物質の属性と運動は質的規定性を代表する。対立物の統一の量的規定性の変化にしたがい、その質的規定性が変わる可能性もあるという側面を見いだすことができる。だからといって物質の量と質の関係を量が質に変わり、質が量に変わるという奇弁をもち出すことはできない。

事物を発展させるためには、物質の構成要素をより高級なものに改造すると同時にその結合構造をいっそう改善しなければならない。物質の構成要素と結合構造がより高級なものに改変されればより高級な対立物の統一をなし、物質の質と運動がまたより高級なものとなるように発展する。

人間は、対立物の統一の水準がもっとも高い物質的な存在として最も高い発展能力をもっており、自己の発展に必要な構成要素と結合構造を目的意識的に改変することができる。物質が発展するためには、構成要素と結合構造の更新がともに必要である。

「否定の否定の法則」の基本的内容は、物質が発展するためには必ず自己更新が必要であるということである。自己更新のためには、既存の自己を否定する過程と自己を新しい基礎のうえで肯定する過程がともに必要である。「否定の否定の法則」は、自己更新の弁証法である。

人間改造のためには、自己批判がなければならない。自己批判は、自己のすべてを否定するのではなく、自己の発展を阻む古いものを否定し、自己発展に助けとなるものを発展させねばならない。社会の発展の場合にも弁証法の三大法則が最高の段階で必要となる。

第四節 チュチェ史観

第一節で述べたように、唯物史観は社会・歴史の発展を自然史的過程として考察し、社会の変化発展の法則を自然的物質の変化発展の法則と同じものとみて生産力と生産関係の矛盾によって惹起する階級斗争によって社会は発展するとみた。

これに対し、チュチェ史観は、人間中心の唯物論と弁証法にもとづいて、社会・歴史の発展は、社会・歴史の主体である人民大衆の自主性の実現をめざす斗争の歴史である、とみる。

金正日書記は論文『チュチェ思想について』で、「チュチェ思想によって明らかにされた社会・歴史原理は、新しい社会・歴史観、チュチェ史観であります」と述べ、金日成主席によって明らかにされたチュチェ史観の基本原則を次の4点にまとめている。

- (1) 人民大衆は社会・歴史の主体である。
- (2) 人類の歴史は人民大衆の自主性をめざす斗争の歴史である。
- (3) 社会的歴史的運動は人民大衆の創造的運動である。
- (4) 革命斗争において決定的役割を果たすのは人民大衆の自主的な思想意識である。

社会・歴史の主体は人民大衆である。これがチュチェ史観の第1の原理であり、根本原理である。

金正日書記は次のように述べている。

「唯物史観は物質世界の一般的法則を社会・歴史に適用したものです。もちろん、社会も物質世界に属するので、物質世界の一般的法則が作用します。しかし、社会には自然とは異なる固有の運動法則があります。自然の運動には主体がありませんが、社会的・歴史的運動には主体があり、社会的・歴史的運動の主体の作用と役割をぬきにしては考えられません。チュチェ思想はまさに、主体の運動としての社会的・歴史的運動固有の合法則性を解明しました。チュチェ思想が解明した社会的・歴史的史観を唯物史観にあてはめて解釈してはなりません。」(『金日成主義の独創性を正しく認識するために』1976年10月2日)

ここで書記が述べているように、「自然の運動」には目的意識的に運動する主体がないが、「社会的・歴史的運動」には目的意識的に運動する主体があり、主体の作用と役割をぬきにしては、社会的・歴史的運動は考えられないのである。

社会的・歴史的運動の主体とは、自主性、創造性、意識性をもつ人間の集団としての人民大衆である。

社会の変化発展は、人民大衆の自主的、創造的、意識的な活動によって発生し、発展する点で、他の一切の自然的物質の運動とは異なる。

金正日書記は次のように述べている。

「チュチェ思想は人民大衆を社会的運動の主体とみなします。

社会的運動はその主体である人民大衆の自主的で創造的で意識的な活動によって発生し、発展します。

人民大衆をぬきにしては自然と社会を改造、変革する社会的運動自体が起こりえず、社会歴史発展が実現されません。

人民大衆が社会的運動で主体となるのは、人民大衆によって社会のすべてのものが創造され、かれらの斗争によって歴史が発展するからであります。』(『人民大衆中心の朝鮮式社会主義は必勝不敗である』(1991年5月5日))

自然の運動は、自然的物質の性質にもとづいて自然発生的になされるが、社会の運動は自主性、創造性、意識性をもつ人民大衆の主体的、能動的運動である。

人間が主体である社会・歴史の運動は、人間の本質である自主性の実現をめざす人間の創造的な運動であり、ここで決定的役割を果たすのは、人間の自主的な思想意識である。

社会は、まず第一に人間の集団である。ところが唯物史観はそうみななかったのであるが、これは何故であろうか。

唯物史観は社会・歴史の発展を観念的にみたり、またある個人の偉大さにみるそれまでの歴史観を否定し、唯物論的に社会・歴史の発展法則を把握しようとし、このため社会を観念的ではなく物質的に考察するとして社会の経済的構造を社会の土台として重視し、この土台のうえに上部構造と社会的意識がなり立って社会をつくりあげているとみたのである。

マメクスは、人間が生きるための物質的生産物の生産は所与の生産関係のもとで行なわれ、この生産関係のもとで生産力は発展し、やがてこの生産関係の枠内では生産力はこれ以上発展できない限界に達したとき、つまり生産関係が生産力の桎梏となったとき、社会革命が階級斗争として発生し、この革命によって生産力と生産関係の矛盾が解決され、古い生産様式が新しい生産様式に移行するとみたのである。このような唯物史観は観念論的歴史観を否定する進歩的側面をもつものであったが、物質世界の最も発展した物質であり社会的存在である人間を中心に社会・歴史の発展をみななかったという点で不徹底であった。

唯物史観は、社会の経済的構造が土台であり、この土台のうえに一定の社会的意識が、土台に対応して成立しているとみた。すなわち社会的存在が社会的意識を規定するとみたのである。もちろん社会的存在が社会的意識を規定する側面があることは否定できない。

マルクス主義の唯物史観における社会的存在が社会的意識を規定するという見解は、存在が思惟を規定するという唯物論的原理を社令に適用したものである。しかし意識が存在によって規定される側面があるのは事実であるが、意識の作用はそれだけに止まるものでない。意識とは人間の意識であり、したがって意識は自主的、創造的に作用する。

もし社会的意識が社会的存在によってのみ規定されるなら、新しい社会を実現しようとする人間の考えは発生することができない。それゆえ人間の意識(思惟、思想)は客観的な存在の反映にすぎないという見解は誤りである。

人間は客観世界（自然と社会）を主体的、能動的に認識するのである。

チュチェ哲学は、思想意識の役割を人間の活動を規定する最も重要な要因とみる。人間は自己の要求と利害関係を反映した思想意識のもとで正しい運動を展開し、世界と自己の運命の主人として生きようとする。

人間は未来の展望をもつ。たとえば労働者階級は資本主義がまだ独占階級に到達していない産業資本主義段階においても将来の共産主義社会を展望し、その実現の方途を明らかにする思想をもつことができたのである。

それゆえ、人間は自然にたいしてはもちろん、社会にたいしても、鏡がものを映すような受動的、一方的な認識ではなく、主体的、能動的に認識するのである。

マルクスとエンゲルスというマルクス主義の創始者たち自身が、資本主義社会の批判的検討にもとづいて、社会主義・共産主義社会を理想の社会としてその実現を求め、党をつくり、労働者階級と結びつき、資本家階級と闘ったのである。このことは、マルクスとエンゲルスの思想が、『経済学批判』の「序言」で述べたように、資本主義社会の土台をなす経済的構造の単なる一方的な反映でないことを実証しているのである。

マルクスとエンゲルスが、社会・歴史の発展法則を、自然史的過程として、自然の弁証法を社会に適用して考察したのは、観念論と観念史観に反対して、科学的な歴史観を確立しようとしたからである。そしてマルクスとエンゲルスの当時におけるこのような考えにも大きな意義があった。

マルクスとエンゲルスが、歴史の発展の原因を人間の頭脳のなかに、哲学のなかに求めるのではなく、物質的生活の生産、つまり経済のなかに求めるべきである、と述べていたことは、すでに第二節「唯物史観」のところでもみた通りである。

マルクス主義は、意識が存在を規定するのではなく、存在が意識を規定すると主張した。これは観念論が、人間の意識、精神が存在を規定するとみる見解に対する批判としては正しい。そしてこの存在が意識を規定するという原理を社会的存在が社会的意識を規定するという原理へと延長させた。マルクスとエンゲルスが唯物論者として自己の理論に一貫性を与えるため唯物史観を確立したことは理解できる。

しかし、マルクスもエンゲルスも偉大な思想理論家である。彼らは資本主義の初期の段階において、すでに理想社会としての共産主義を掲げた。これは、何ら土台としての下部構造の反映ではない。彼らは労働者教育に関心を深くもち、講演を行ない、多くの著書と論文を発表した。これは、彼らが哲学に深い関心をもっていたことを意味するし、また歴史をつくる人民大衆の役割を理解していたことを意味する。彼らは、単に生産力と生産関係の矛盾が社会を発展させる根本原因であるとはみていなかったのである。ここに、革命家、実践家としてのマルクスとエンゲルスが唯物史観の理論家としてのマルクスとエンゲルスの対立というべき相違がみられるのである。そして、前者が正しく、後者は誤りだったのである。

唯物史観の誤りの若干を指摘すれば以下の如くである。

まずマルクスは「人間は、彼らの社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した生産関係にはいる」（前出）と述べているが、ロシアで最初の社会主義制度が樹立したのも、レーニンが党を組織して革命をしたからであって、人間の意志から独立して社会主義的生産関係をつくったものではない。

また、原始共同体から奴隷制社会、封建社会、資本主義社会への移行も、それぞれの社会内部の人民大衆が、それぞれの社会を桎梏と感じ、奴隷の反乱、百姓一揆などを行なって次の社会を求めたからである。

またマルクスは「一つの社会構成は、それが生産諸力にとって十分の余地をもち、この生産諸力がすべて発展しきるまでは、けっして没落するものではない」（前出）と述べているが、これも誤りである。

生産力の発展が高い水準の資本主義の先進国から新社会、すなわち社会主義社会が生まれたのではなく、ロシア、朝鮮、キューバー、中国などの生産力の低い国が社会主義へ移行したのである。

唯物史観は結局、革命と建設の主体である人民大衆を中心として社会・歴史の発展をみず、主体としての人民大衆を強化し、その役割を高めるといふ根本原則を理論化しなかった——ただしマルクスとエンゲルス、そしてレーニンが革命家として実践活動において人民大衆を重視したことは前述の通りである——のである。

このため、マルクス・レーニン主義を教条的に理解して、社会主義制度が樹立されたあとは、ただ生産力を向上させさえすれば、社会主義の高度な段階である共産主義社会へ到達できるとして、人間改造をおこたり、思想を重視せず、このため、ソ連、東欧の社会主義は崩壊したのである。

すでにみたように、この物質世界で、社会を構成し、社会的存在である人間だけが、目的意識的に世界（自然と社会と人間）を変革改造することができるのである。人間以外の物質は、ただその自然的、生物的属性にもとづいて変化発展するだけである。しかし、人間は自主性を実現するために、社会的、創造的な運動を行なう。

金正日書記は『チュチェ思想教育における若干の問題について』のなかで次のように述べている。

「社会的運動は人間がおこし、人間がおし進める人間の運動です。社会的運動を起こす原因も人間にあり、この運動をおし進める力も人間にあります。人間は自己の自主性と創造性、意識性の発展水準にふさわしく自然と社会を改造する創造的運動をくりひろげ、自己の運命を開拓する社会的運動をおし進めていきます。」

そして、書記は客観的条件について次のように述べている。

「いうまでもなく、人間は客観的条件を無視して歴史を創造することは不可能ですが、客観

的条件は固定不変のものではなく、人間の創造的活動によって、人間に遊離に変えることができるものです。歴史発展において決定的役割を果たすのは客観的条件ではなくて人間です。」

この世界は、弁証法が教えているように、対立物の統一から成り立っており、物質の矛盾した関係から成り立っている。

社会もそうである。社会を発展させるためには、人民大衆は大きく分けて三つの矛盾をたえず解決しなければならない。

その一つは、社会と自然の矛盾である。社会は自然なくしては存在できず、この意味で自然と統一、もしくは同一の関係にある。しかし他面、社会は自然と対立する側面をもっている。例えば河川が氾濫して人間に災害を与えるなどがそれである。この矛盾は、人間が堤防を築くことなどにより、また河川の流れを変えることなどにより解決できる。つまり、人間は自然を社会の要求に即して改造し、社会と自然の矛盾を克服するのである。社会的運動の第一は自然改造運動である。

第二の矛盾は、社会の内部にある新しいものと古いものとの矛盾である。社会を発展させるためには、社会をたえず更新しなければならない。社会制度の更新はなかでもとくに重要である。社会的運動の第二はこれらの社会改造運動である。

第三の矛盾は、人間の内部にある新しいものと古いものとの矛盾である。人間は古い、誤った思想意識を克服して、自主的な思想意識を発展させ、またより高い創造力を身につけなければならない。すなわち、人間改造運動を不断におこなわなければならない。

以上の、自然改造、社会改造、人間改造という社会的運動の三つは、人民大衆が歴史的、社会的に行なってきた自主性の実現をめざす運動である。

朝鮮民主主義人民共和国は、人民政権樹立後、三大改造運動を「人民政権プラス三大革命イコール共産主義」というスローガンのもとで遂行している。ここでいう三大革命とは思想革命、技術革命、文化革命のことである。

金日成主席は『思想革命、技術革命、文化革命をさらに力強くおし進めよう』（1973年3月14日）のなかで次のように述べている。

「一部の人は、古い社会制度をくつがえし新しい社会制度をうち立てることだけを革命とっていますが、われわれはそうは考えません。思想・技術・文化の分野で古いものを新しいものにかえるのも一つの革命であります。したがって、思想・技術・文化革命も必ず陳腐で停滞したものとのたたかいをおしてのみ遂行されます。思想・技術・文化革命がなんの斗争もなく、なにごともしに、しかも順調に遂行されるものと考えるのは愚かなことです。思想・技術・文化革命を遂行する斗争は、社会主義共産主義の勝利をめざす深刻なたたかいです。」

このように、思想・技術・文化の三大革命は、社会主義制度を樹立したのちに労働者階級の党が遂行すべき革命の基本内容であり、共産主義を建設するまで継続しなければならない総路線である。

しかるに、唯物史観を教条的に受けとめ、社会主義制度が樹立されたなら、あとは経済建設を遂行し、生産力を向上させれば共産主義社会に到達すると考えたソ聯、東欧の党の指導者は、自国の社会主義を崩壊に導いたのである。

三大革命は三大改造運動の社会主義社会における具現である。それはまず第一に、人民政権を強化発展させることによって、社会改造運動を続行し、思想革命によって人間改造を、また技術革命によって自然改造運動を遂行するからである。さらに文化革命もやはり主として人間改造運動である。

崩壊した社会主義諸国は、人間改造、思想革命を重視しなかった。しかし、社会の発展をうながす基本的要因はあくまでも人間の思想である。

金正日書記は、『社会主義にたいする誹謗は許されない』（1993年3月1日）で次のように述べている。

「社会主義の本質的優位制は、社会が人民大衆の団結した力によってたえまなく発展するところにある。

社会が発展するということは、世界における人間の地位と役割が高まるということを意味し、世界における人間の地位と役割が高まるということは、人間の本質的属性である自主性、創造性、意識性が高まるということの意味する。いいかえれば、自主的な思想意識と創造的能力の向上にふさわしく人間の役割が強まり、人間の役割が強まるにつれて社会的財貨がふえ、社会関係が改善されていくということである。したがって、どの社会が発展能力をそなえた社会であるかは、つまるところどの社会が人間の自主性、創造性、意識性をさらに強く発揮させる社会であるかということに帰着する。人間の自主性と創造性は意識性によってうらうちされるのであり、したがって人間の活動では意識が決定的な役割を果たすといえる。人間の活動で意識が決定的な役割を果たすということは、思想意識が決定的な役割を果たすということの意味する。思想意識は人間の要求と利害関係を反映した意識であり、人間の活動の目的と方向、意志と斗争力を規定する。したがって、社会の発展をうながす基本的要因は、あくまでも思想意識に求めるべきである。社会の発展を力強くうながす思想意識は自主的な思想意識であり、人民大衆の自主意識発展のもっとも高い段階の思想意識は社会主義的思想意識である。」社会主義思想で武装した人民大衆の強い革命的自覚と創造的積極性によって発展する社会主義が、最高の発展能力をそなえた社会であることは論ずるまでもない。

しかるに崩壊した社会主義諸国の党は、社会主義思想を放棄して帝国主義に屈服したのであり、人民大衆を苦しみのなかに放置したのである。

では社会主義思想とはどのような思想であろうか。

社会主義思想とは、人民大衆が社会主義の正当性と優位性を確信し、社会主義の原理・原則を堅持し、社会主義社会の主人は自分たちであり、社会主義社会は自分たちが社会の共同の主人として指導者と党の指導のもとに建設する社会であり、このためには革命的集団主義、すな

わち「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という精神に徹する思想である。このような社会主義思想で武装した人民大衆は必勝不敗である。

ソ聯、東欧の社会主義建設の失敗は、基本的にはそれらの国の党と指導者が、人民大衆を中心にして社会主義を社会主義思想でしっかり武装させなかったからである。

金正日書記は『革命的党建設の根本問題について』（1992年10月10日）のなかで次のように述べている。

「歴史的経験は、思想が変質すれば労働者階級の党と社会主義制度も変質し、自己の存在を終えるようになることを示している。党内にうらぎり者があらわれ、党が組織的、思想的に瓦解したのも、民心がかわったのも、思想の変質からはじまった。思想が変質すれば、偉大な経済力や軍事力も無力な存在になり、数十年の発展過程をへてきた社会主義制度も崩壊するのである。」

金正日書記は、社会主義をむしろむもっとも危険な思想潮流として、修正主義と教条主義、事大主義をあげて、次のように述べている。

「社会主義思想と直接対立する思想はブルジョア思想であるが、ブルジョア思想は社会主義思想の牽引力をおしとどめることはできない。搾取階級の貪欲な階級的な要求を反映したブルジョア思想は、いくら偽善的な言葉で粉飾しても、その反動的本質をかくすことはできない。……それゆえ、帝国主義者と資本家は、社会主義思想をかれらの気に入るようになおした修正主義を思想的道具として利用したのである。修正主義者は、昔もいまも社会主義偉業の遂行において主なる危険となっている。修正主義は共産主義運動内にあらわれたブルジョア思想の反映であり、資本主義国においては社会主義への革命的移行の道を阻み、社会主義国では資本主義復活の道を開くとともに、帝国主義者の『平和的移行』戦略の思想的道具として利用されてきた。われわれは、現代修正主義がいかにか巧妙に自分を偽装したとしても、その反動的本質を見ぬき、それに断固反対し、排撃しなければならない。」（同上）

また書記は、教条主義と事大主義について次のように述べている。

「社会主義偉業の遂行において、教条主義、事大主義がまた危険な思想的要素となる。教条主義、事大主義は、社会主義思想がその生命力を正しく発揮できないようにする。教条主義、事大主義にそまると、自分の信念にもとづいて活動するのではなく、他人のいいなりになり、他人が修正主義にはしれば自分も修正主義をひきいれ、しまいには発達した資本主義諸国に幻想をいただき、資本主義的方法もやたらにひきいれるようになる。われわれは教条主義、事大主義のささいなあらわれも許さず、つねにチュチュの信念をもち、すべての問題を朝鮮人民の要求とわが国の実情に即して解決していかねばならない。」（同上）

書記は『社会主義にたいする誹謗は許されない』のなかで、「かつて社会主義偉業にたいする忠実性を口ぐせのようにならしていた人たちが、一朝にして社会主義のうらぎりものに転落したのは、つまるところ社会主義を信念化、道徳化できなかったためである。これは、社会の

全構成員のあいだで社会主義を信念化、道徳化する思想改造が、社会主義を固守し最後まで完成させるうえで第一義的に解決すべきもっとも重要な活動であることを示している」と述べているが、思想革命は社会主義建設の成否を決するもっとも重要な革命である。

社会・歴史の発展は自主性の実現をめざす人間の発展の歴史であり、歴史を創造するのは結局は人間である。

唯物論と弁証法が真の唯物論と弁証法になるためには、既述のように人間を中心とした唯物論と弁証法にならねばならず、また歴史観も唯物史観でなく人間を中心とするチュチェ史観とならねばならない。

人間中心の唯物論の究極の課題は、物質世界の最高の所産である人間が、世界で主人の地位を占めていることを明らかにすることであり、人間中心の弁証法の究極の課題は、物質世界の最高の所産である人間が、世界と自己の運命の主人として決定的役割を果たすことを明らかにすることである。

チュチェ哲学は、すでにみたように、三つの原理を明らかにしてこの課題を解決した。

チュチェ史観もまた、三つの原理にもとづいて社会・歴史の発展法則を明らかにしたのである。

人類はあと数年で21世紀を迎える。地球上にはさまざまな事態が発生している。しかし地球上の変化がいかに激しいからといって、それによって歴史の基本的発展方向は変わるものではない。歴史はその主体である人民大衆の自主的地位と創造的役割が高まる方向へと発展している。世界の進歩的な勤労人民大衆は自由で平和で友好的な新しい社会の実現を待望している。

この待望を現実化するのには人民大衆の実践である。